

第7 令和元年度 学校・家庭・地域連携 推進に関する研究委嘱 実践事例



さつまいも栽培
横瀬町立横瀬小学校

朝霞市	朝霞市立朝霞第四小学校
研究テーマ	学校を核とし、地域と連携・協働したコミュニティ・スクールの推進 ～コミュニティ・スクールを活用した学校応援団活動の活性化～

1 研究のねらい

本校は、平成31年4月に学校運営協議会を設置し、地域と一体となって子供たちを育む「地域とともにある学校」づくりを目指して、コミュニティ・スクールとしてのスタートを切った。1年目となる今年度は、学校運営協議会を計画的に実施し、学校の思い、地域の方々の思いを反映させながら、双方でできることを考え、本校の実態に即して実践を進めることとした。特に、児童の学力の向上と、学校を中心に家庭・地域との連携の更なる充実・活性化を目指した取組を中心に進めている。

2 活動の概要

(1) 本校の学校運営協議会について

本校では、朝霞市最初のコミュニティ・スクールのスタートに先立ち、前年度に学校運営協議会準備会を2回開催し、学校としての方向性の確認や学校運営協議会の委員長と副委員長選出を行った。

①委員の構成…学校、地域、PTAの代表者

②開催の実績（予定を含む）

平成30年度		
平成31年 1月15日(火)	準備会①	
平成31年 3月27日(水)	準備会②	
令和元年度		
平成31年 4月17日(水)	第1回学校運営協議会	
令和元年 5月18日(土)	第2回学校運営協議会	
令和元年 8月26日(月)	第3回学校運営協議会	
令和元年12月13日(金)	第4回学校運営協議会	
令和2年 2月12日(水)	第5回学校運営協議会	
令和2年 3月25日(水)	第6回学校運営協議会	

(2) 地域への発信について

コミュニティ・スクールとしての取組を理解し、知ってもらうため、広報誌の内容を学校の行事や児童の活動の中心の報告から、PTA活動や地域での活動の報告に一新した。

3 研究内容

(1) 保護者や地域の方との協働活動拡大のための主な取組

- ①学校ファーム貸し出し…手入れが行き届かず、雑草で覆われていた畑の半分を地域の方に貸し出した。その際、教材園の管理を依頼した。
- ②児童の見守り活動…校外学習で近隣施設に見学に行く際、児童の安全を見守るために一緒に歩いていただいた。さらに、施設見学も一緒にしていただいた。
- ③地域の方との交流…本校1年生児童と特別養護老人ホーム朝光苑との交流会を実施した。
- ④小中一貫の取組…本校と同様にコミュニティ・スクールとしてスタートした朝霞第一中学校とあいさつ運動を実施した。また、朝霞第一小学校、朝霞第六小学校を加えた4校によるふれあいフェスティバルを開催した。



[学校ファーム貸し出し]



[見守り活動]



[朝光苑訪問]



[あいさつ運動]



(2) 新たな取組 地域合同防災訓練・防災フェスティバルの開催

本校では、昨年まで、11月の教育週間の土曜公開日の午後にPTAで組織された四小まつり委員会が中心となって四小まつりというイベントを行っていた。しかし、今年度、その委員会を解体し、新たに防災フェスティバル委員会を立ち上げた。そして、①児童に防災に関する体験的な活動を通して防災意識を高める ②災害発生時、学校が避難拠点となるため、地域で協力して災害に備える意識を高めること、の2点を目的とした防災フェスティバル開催の計画を進めた。

準備にあたり、まず、朝霞市の地域づくり支援課や危機管理室に相談した後、危機管理室、防災アドバイザー、町内会長、PTAの方々との意見交換会を2回実施した。同時に、消防署や消防団とも連絡調整をしながら準備を進め、令和元年11月2日（土）に防災フェスティバルを開催した。



【防災アドバイザーによるクイズ】



【消火体験】



【ジュニア救命講習】



【講演会】

○防災フェスティバル当日の主な取組内容

- ・防災アドバイザーによるクイズ・朝霞消防署による煙体験（1・2・3年生）
- ・朝霞消防署による起震車体験・消防団による消火体験（4年生）
- ・埼玉県南西部消防本部によるジュニア救命士講習会（5・6年生）
- ・PTA学習委員による講演会の開催
- ・防災フェスティバル委員、町会長や防災班の方々には体験活動補助や災害非常食の試食準備・提供を依頼した。

○成果… 多くの方々の協力で、子供たちに貴重な体験活動をさせることができた。

- ・楽しみながら防災について学べる場になっていた。

○課題… 天候の影響、消防署が緊急出動した際には、活動内容の変更が必要。

- ・連絡調整が難しく、細かく役割分担をしていく必要がある。

4 研究の成果

- (1) 少しずつではあるが、コミュニティ・スクールが軌道に乗り、保護者だけでなく、地域の様々な方からの協力を得られることで、教育活動の充実が図られ始めている。
- (2) 様々な活動を進めるにあたり、PTAや地域、そして、危機管理室や地域づくり支援課とも連携を図るきっかけを作ることができた。

5 課題と今後の展望

- (1) コミュニティ・スクールとはどのようなものなのかを、学校の教職員がもっと理解することと、地域や保護者にも理解してもらう必要がある。
- (2) 学校のニーズと地域で協力できることの調整も必要。学校として地域の方々に、任せられる部分は、完全に任せていくことも必要になってくる。

課題を解決するためには、学校運営協議会において、学校と地域が当事者意識をもって主体的に学校経営に関わり、熟議を重ねていく事が大切である。

また、コミュニティ・スクールとして外部と連絡調整をする校務分掌をつくり、様々な教員が関わっていく体制を整えていくことも必要になってくる。学校を中心に、家庭や地域の方の関わりが密になり、さまざまな形で運営に関わることで教育活動が充実し、更には教員の負担軽減にも繋がっていくことになる、と考えている。

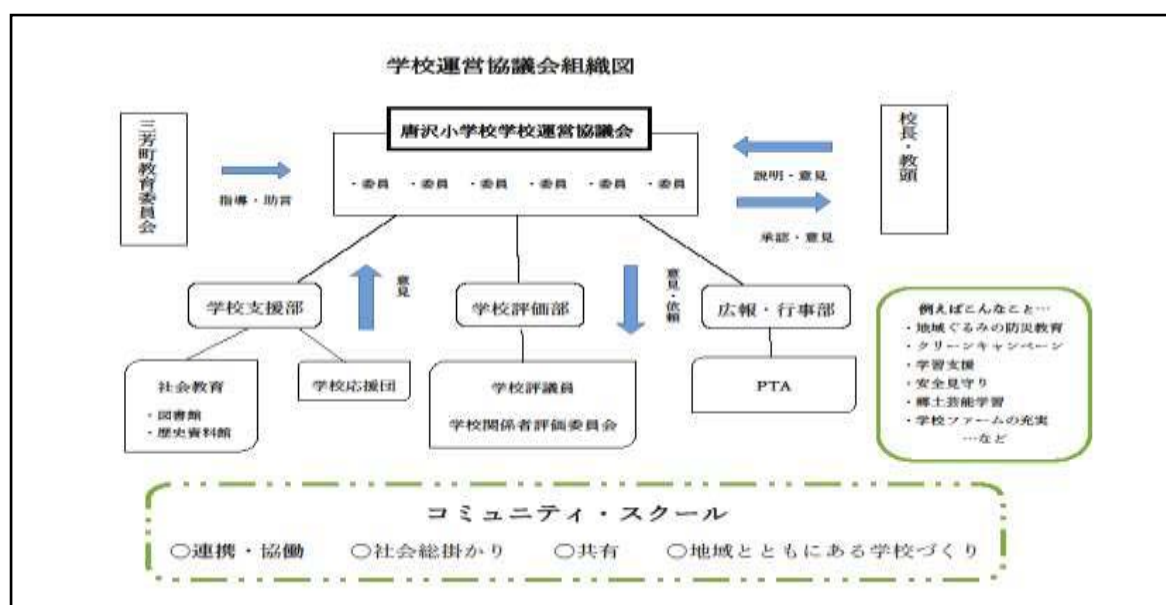
三芳町	三芳町立唐沢小学校
研究テーマ	子ども・地域・教職員が一体となって、計画的に取り組む学校応援団 ～学校と学校応援団の連携強化による一体的な協議活動の実施～

1 研究のねらい

本小学校では、現在約50名の保護者、地域の方々に、学校応援団として支援をいただいている。

三芳町では、令和2年度から唐沢小学校を含めた3校においてコミュニティ・スクールを先行的に実施するにあたり、令和元年度は、その準備期間にあたる。学校応援団という今ある組織を生かしつつ、地域学校協働本部として再構築し、地域と学校が連携・協働し、同じ目標に向かって共に活動を推進していくために、本テーマのもと研究に取り組むことにした。

2 活動の概要



本小学校の学校応援団活動では、主に以下の部が活動を行っている。

【学習支援】①読み聞かせ②書写（書き初め支援）③家庭科（裁縫支援）④英語⑤水泳

【環境整備】①環境（唐小林で遊ぶ会）②農園③図書整理④清掃

【安全支援】①安全

今年度は、応援団をコミュニティ・スクールに位置づけ、地域と学校が連携・協働し、同じ目標に向かって共に活動を推進していくために、以下の4点について重点的な取組を行った。

- (1) 学校応援団会議の開催
- (2) 学校応援団のコーディネート機能の強化
- (3) 応援団員の拡充
- (4) 学校運営協議会における応援団組織の再構成

3 研究内容

(1) 学校応援団会議の開催

4月に学校応援団会議を開催し、学校と応援団メンバーで目標を共有した。年間を見通した活動を行うため、各部ごとに年間計画を作成した。また、意見を集約し、学校運営協議会に提出し、他組織との連携を図った。3月の応援団会議では、1年間の活動をふり返り、課題についての改善策を学校運営協議会に提出し、来年度に引き継ぐことにした。

(2) 学校応援団のコーディネート機能の強化

学校応援団コーディネーターの機能を、①学校運営協議会からの要望を聞く②応援団を要請する③応援団と学校との連絡調整を行う④応援団各部の意見を運営協議会に提出する⑤応援団を募集する⑥応援団名簿の作成等応援団を組織する等、明確化した。また、これらの機能を一人のコーディネーターで行うには、負担が大きいため、教職員と分担し、連携体制をスムーズにした。

(3) 応援団員の拡充

3月に学校応援団を募集し、4月に再度募集をかけた。学校応援団メンバーからも参加の呼びかけをしていただいた。キャッチフレーズを「できるときにできる範囲での協力を！」とし、いつ休んでもいいし、いつ手伝いにきていただいてもかまわない、肩肘張らずに協力してほしいことを、案内文書で繰り返し強調した。また、活動の様子については、便りでお知らせした。学校運営協議会でも地域関係者に応援団募集を呼びかけた。

(4) 学校運営協議会における応援団組織の再構成

学校運営協議会の下部組織として、学校支援部、学校評価部、広報・行事部がある。そのうちの実働部として機能するのが学校支援部である。学校応援団は、学校支援部に属することにした。このような組織を編成することにより、学校運営協議会を中心に、応援団、PTA、民生委員、幼保、中学校が連携し、より地域と学校が連携した活動ができると考えた。



【応援団会議】



【応援団農園部の活動】

4 研究の成果

(1) 大人みんなで子供を育てようとする意識の醸成

ばらばらだった活動が、学校運営協議会で統合され、学校、応援団、PTA、地域、保護者が連携した活動を行うことができた。それにより、地域の大人みんなで子どもを育てているのだという意識が醸成されてきた。

(2) 専門性を生かした地域人材の活用

外国語や書写、農作業等専門性を生かした地域の人材の活用ができた。子供の力を高めることに役立てられた。

(3) 教師の負担削減

書き初めの準備、後片付け、農園整備、校舎内外の整備等教師の負担削減につながった。

5 課題と今後の展望

応援団コーディネーターの役割は多岐に渡る。これらコーディネーターの仕事を自分の仕事の片手間に行うには負担が大きい。コーディネーターの仕事を学校運営協議会で分担できるように検討していく。